

情報フォトニクスを志す若い研究者への エール

黒川 隆志

(東京農工大学)

「情報フォトニクス」というまっとうな特集名から、一般の人たちが想像する中味はデジタルカメラ、光ディスクといったものであろうが、実は少し前まで「光コンピューティング」とよばれていた分野の発展形（？）らしい（昨年、光コンピューティング研究グループが情報フォトニクスに名前を変え、世代交代も進んだ）。このような分野名の変遷は、その研究の発展に伴いしばしば起こるものであるが、この分野についていえば、現在学界全体が置かれている厳しい状況のなかで、研究グループが模索して得たひとつの方策の結果とみえる。

大学は現在独立法人化の流れのなかで、21世紀COE、产学協同といった競争的環境下に身を置かれている。今後10年間でノーベル賞を20人出そう、大学ベンチャーを1000社作ろう等と、いずれも工場で大量生産するのと同じ発想である。企業も価格競争に巻き込まれ、競争のために真に必要な次世代技術の育成どころではない。競争原理は不可避だが、大学の場合は表面的競争による表面的採算に終始し、企業の場合は競争すべき対象を間違えているように思える。

以前、「光コンピューティング」という分野は少し怪しげで、変人のやるものという見方が少なからずあった。しかし学界を取り巻く最近の情勢のなかでは、変人を許容する余地はどんどん狭まっている。ノーベル賞の例を引くまでもなく、真に独創的な研究が認知されるのには、20年程度の歳月を要する（昨年の田中氏の場合、ノーベル賞を受賞しなかったらこの先もしばらく、学界からも職場からも十分に認知されなかつたのではないかと個人的に推測する）。

「光コンピューティング」の歴史を改めて振り返ると、ビジョンチップや空間変調器等のビジネス成功例、光インターフェクションや全光通信処理へのトレンドづくりなど、有形無形に多くのインパクトを与えてきたことに気付く。にもかかわらず、この厳しい状況のなかで変人たちが元気にやっていくことは大変であり、今回の特集にとって研究者間の議論がさらに活発になることを期待したい。ただそれにとどまらず、現在の競争的環境をより積極的に利用していくしたたかさと知恵をもつことも必要である。また同時に、表面的成功、表面的採算に惑わされず、志を高くもって独創的な研究を進めて欲しいと、特に若い研究者にお願いしたい。